

ひきこもりの子を持つ親の苦悩に関する研究 -苦悩の理解から支援のあり方を考える-

Study on the Parents' Distress Whose Children are Social Withdrawals
-Thinking about how to Support from Understanding Distress-

学籍番号 47-136748
氏名 柴田 瑛司 (Shibata, Eiji)
指導教員 清水亮 准教授

1.研究の背景

内閣府が 2015 年に実施した調査では全国の約 54 万人がひきこもり状態にあると推計された。ひきこもり支援に目を向けると、伊藤ら(2003)の調査では、ひきこもりに関する相談に訪れるのは、本人よりも家族・親戚が圧倒的に多く、支援は家族など周囲の相談から始まるとしている。そのような背景もあり、厚生労働省が 2010 年に公表した『ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン(以下、ガイドライン)』では、本人の社会参加に向けた支援モデルとして「ひきこもり支援の諸段階」を提示している。この支援モデルでは、家族支援を第一段階として位置付け、ひきこもり支援は、家族支援から始まり、次第に当事者が中心の支援段階へ進んでいくとされている。このように、ひきこもりという状態の性質上、その支援は、家族支援が重要な役割を果たすと考えられている。

2.先行研究の検討と研究の目的

親の苦悩に関してこれまでの研究では、子どもに変化をもたらすような親の心理・行動の変化プロセスに関する研究の中で付随的に言及されたものや、アンケート調査の分析から量的な把握を目的としたものが

中心であった。1.で触れたように、ひきこもり支援は家族支援から始まることが多く、家族の存在は支援の中で重要な位置を占める。そのため親についての研究が必要であると考えられる。さらに、ひきこもりという状態の多様性を考えると、それぞれの親の置かれた状況を勘案する必要がある。そこで本研究では、親の抱える苦悩に主眼を置き、それを質的に把握することを目指す。そして親の抱える苦悩の理解から、ひきこもり支援のあり方を考えることを目的とする。

3.研究方法と研究対象の概要

3-1.研究方法

ひきこもりの子を持つ(持っていた)親を対象に、約 1~2 時間/回のインタビューを複数回実施した。さらに、対象者の所属する親の会及び勉強会への参与観察や、関連する資料・書籍の分析、会のスタッフへのインタビューを実施した。インタビューは親の会のつながりで出会い、研究の承諾を得た方 6 名に対して、「現在の状況及び現在に至るまでのお話を聞かせて欲しい」と伝え、あとは自由に語ってもらった。その後、その時々気持・苦悩などを個別に質問した。インタビュー対象者の概要は表 1 に示す。

表 1:インタビュー対象者の属性

インタビュー対象者(年齢)	子どもの性別(年齢)	子どもの現在の状況	ひきこもり始めた時期・期間	
A	男性(70代)	女性(40代)	主婦・別居	中学2年・約3年間
B	男性(70代)	女性(40代)	ひきこもり・同居	高校卒業・約20年間
C	女性(70代)	男性(40代)	就労・一人暮らし	20歳・約15年間
D	男性(60代)	男性(30代)	ひきこもり・同居	20歳・約15年間
E	女性(60代)	女性(30代)	ひきこもり・一人暮らし	30歳頃・約7年間
F	男性(70代)	男性(40代)	ひきこもり・同居	20歳・約20年間

3-2.本研究におけるひきこもりの定義

ひきこもりはその主体によって様々に定義され、精神障害を含めるか、外出するか、社会参加するかなど複数の論点が存在し、その定義は多様である。本研究では親の主観的な苦悩に焦点を当てる。そのため客観的な指標でひきこもりを定義するのではなく、「親が自分の子どもをひきこもりであると捉え、その考えに基づいた行動をしていること」を本研究におけるひきこもりの定義とする。

4.行政によるひきこもり支援と家族支援

現在及び今後の、行政によるひきこもり支援と家族支援を、先述のガイドラインを参考に整理すると、2つ重要な点が見える。

■本人への媒介者としての家族

家族支援の内容として、家族を変化させることで当事者の変化を促す「家族相談」と、ひきこもり及び当事者への理解から、適切なはたらきかけを教える「心理教育」の組み合わせが考えられている。すなわち、家族は本人支援につなぐための媒介者としての役割が求められている。

■就労支援の充実

2010年代以降にニート概念が流行した後は、ひきこもり支援は急速に就労支援の対象とされるようになり、その傾向は現在も継続している。さらに今後は、「生活困窮者自立支援制度」との連携を強めていくことが目指されており、そこでも自立相談機関

との連携によって、よりスムーズに就労支援へとつなぐことが考えられている。

5.親の苦悩の所在

インタビューでの語りから、親の抱える苦悩として、〈本人への対応の迷い〉、〈子どもの将来への不安〉、〈(自分・子ども含めて)行動・考えが変わらない〉、〈子どもとの関係〉、〈過去の対応の後悔〉の5つのカテゴリーが見られた。そして、このカテゴリー間の関連から、親の苦悩の重要な点として「親によるひきこもりの責任の引き受け」と「コミュニケーションに起因する悪循環」の2つが見出された。

5-1.親によるひきこもりの責任の引き受け

■責任を引き受けることで得る希望

A、Cさん以外の4名からは〈過去の対応の後悔〉、「もし、あのとき、…していたら、かもしれない」という仮定法を使った語りがあった。やまだ(2000)によると、仮定法による語りは、「変えられない過去の事実を納得する方法」である。さらにその後「だったら(こうしよう)」という形をとることで、「自己の思考を過去から未来へ向け変える時間軸を転換する働き」を持ち、「現状を変えていく力を回復することができる」としている(やまだ2000,pp.94-95)。このような理解に基づくと、親は子どもがひきこもった原因が過去の自分の対応にあったというストーリーに自らを位置付け、子どもがひきこもったことに納得し、

現状を変えていくための力を得ていた。さらに「もし、あのとき、…していたら」の部分から自らの責任として引き受けることで、自分を変えることで子どもを変化させられるという希望を持つことができる。以上から、子どもがひきこもった原因を自らの責任であるとするストーリーは、子どもがひきこもった理由がわからず困惑している親にとって、受け入れやすいものであると考えられる。Aさんからこのような語りが聞かれなかったのは、Aさんがこの4名と異なり、多少の不安を抱えつつも子どもの現状に変化を求めておらず、ひきこもりになった原因を何かに求める必要がなかったためだと考えられる。また、Cさんは、10年以上自分を変える取り組みを続ける中で、子どもに考えていたような変化子どもに見られないという状況に直面したが、子どもに発達障害の可能性が示唆されたことで、ひきこもりの原因をそこに求めることができるようになったと考えられる。

■責任を引き受けることで背負う苦悩

責任を引き受けることで親が背負う苦悩の1つ目に「考え・行動を変えることの難しさ」の語りが聞かれた。親は本や学習会などで、ひきこもりや本人への理解を深め、対応方法を学んでいる。しかし、その学びに沿って自分の考えを変えることや、学んだ対応を生活の中で実行することに困難を感じていた。2つ目に「子どもに思ったような変化が見られないことへの葛藤」が聞かれた。上で触れたような困難を感じつつも、自分の考え・行動が変化したと思っても、子どもに思ったような変化が見られない状況に直面することがある。変化が見られていることは肯定的に感じながらも、もっと変化が見られて欲しいなどの葛藤を感じていた。

まとめると、子どもがひきこもった原因を親の過去の対応に帰すストーリーは、困惑し、対応に困る親にとって受け入れやすいストーリーであり、多くの親が自らの状況をそのように位置付けていた。一方そうすることで、「考え・行動を変えることの難しさ」と、自分を変化しても「子どもに思ったような変化が見られないことへの葛藤」を感じていることが明らかになった。

5-2. コミュニケーションに起因する悪循環

■親子のコミュニケーション問題

インタビューではそれぞれが抱える苦悩が聞かれたが、そこにはコミュニケーションの問題が共通していた。2名(B,Dさん)はその点が問題であると明確に感じていたが、これは他の対象者と比べて、現在の子どものコミュニケーションの頻度が少ないためだと考えられる。しかし他に聞かれた苦悩でも、＜子どもの将来の不安＞を感じている人(B,C,E,Fさん)は、将来そのものへの不安もあるが、そのことについて本人と考えを共有したいと考えており、それができないことに苦しさを感じていた。また、＜本人の対応への迷い＞が聞かれた人(B,Fさん)は、自分の行動に対して子どもがどう感じているのかわからず行動できなかつたり、迷いつつ行動したりしていた。一方で、Aさんは娘の離婚という＜子どもの将来への不安＞を語ったが、今は本人が辛ければ言ってくれるという信頼があるため、普段は娘のことで苦悩することなく生活できていた。以上から、苦悩を感じている親にはコミュニケーションが取れていないことが共通の問題としてあり、中でも、将来について話をする時など、その時点の関係から踏み込んだコミュニケーションを取る際に、強く

問題として意識されていた。これは、ひきこもり本人とのコミュニケーションでは、本人が気にしているとされる、就労・就学・社会復帰などの話題を出すことは、避けるよう求められる場合が多いためだと考えられる。

■踏み込んだコミュニケーションを取りづらくさせる構造

Bさんからは、子どもに対して踏み込んだコミュニケーションをとっていいと医師から言われているがそれをできず、理由として子どもとの関係をこじらせたくないからという語りが聞かれた。これは、現在コミュニケーションが取れていないことで、自分の行動に対する子どもの反応が予想できないため、踏み込んだコミュニケーションが取れず、そのまま子どものことが分からない状態に留まってしまっていると推察された(図1中①)。加えて、Bさんは高齢になったことで、対応に失敗した場合に関係を修復するための時間が重くのしかかり、関係がこじれることを一層危惧していると考えられた。つまり、行動を起こさないことで現状の关系到留まるばかりでなく、時間が経つことで、より行動が取りづらくなる構造が存在する(図1中②)。ひきこもりの親子の高年齢化が指摘される近年では、特にこの点は大きな問題となる。

ここまでをまとめると、親が抱える苦悩には、コミュニケーションが取れていないことが共通の問題として存在していることが考察された。さらに、コミュニケーションを取りづらくさせる要因として、現在のディスコミュニケーションが将来のディスコミュニケーションを誘発する「コミュニケーションに起因する悪循環」(図2)の構造が

存在していた。

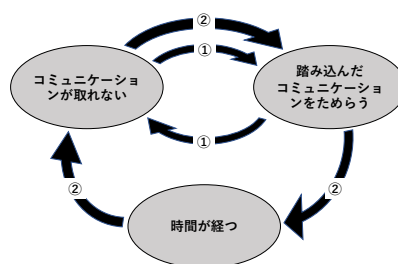


図1：コミュニケーションに起因する悪循環

6.どのような支援が必要か

行政による支援では、親が変わることで子どもも変わると考えられ、そのための家族支援が行われている。しかし、親の考え・対応が変われば、自然に子どもが変わるわけではなく、どこかでそれまでの親子関係から踏み込んだコミュニケーションをとることが求められる。そしてその決断をするのも、失敗のリスクを背負うのも親である。そのため、5.で見たように、親は現状の关系到留まってしまっていた。一方で行政による支援を考えると、本人が支援機関につながった後の、就労支援の充実が今後も継続して目指される方向にある。親の現状から考えると、親が子どもとの関係を変化させていくプロセスにこそ支援が必要であると考えられる。

参考文献

- 内閣府政策統括官(2016)『若者の意識に関する調査』
- 伊藤順一郎編(2003)『10代・20代を中心とした「ひきこもり」をめぐる地域精神保健活動のガイドライン-精神保健福祉センター・保健所・市町村でどのように対応するか・援助するか』
- やまだようこ編著(2000)『人生を物語る-生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房